

## 第9回全国協議会時点での革命の到達点

ロシア共産党（ボ）第九回全国協議会

1920年9月22 - 25日

### 一 党建設の当面の任務についての演説

9月24日

同志諸君、討論のなかでおこなわれた一部の言明、それどころか一部の演説すら、それが注目に値するのは、それがもはやたんに極度の疲労を明らかにあらわしていただけでなく、この疲労がヒステリー状態に達して、したがってまったくよけいなことを論じていたからにすぎない、というふうには私には思われる。そこにはデマゴギーがあるとは言えない。肉体的な極度の疲労がヒステリー状態に達したのである。ルトヴィーノフやブブノフの発言は多分にそういうもので、そのなかではデマゴギーよりも極度の疲労のほうが多かった。メドヴェーデフの言明にもある程度極度の疲労が現れていた、と私には思われる。彼はこう言った。「いまでは諸君全部が病的現象があると言いだしている。しかし、以前には諸君はそれを否定していた、諸君はうそを言っていたのだ」と。私は、こういう説明はかならずしも正しくない、それどころかまったく正しくない、と考える。じっさい、われわれが言っているような不健全な現象があるということ——これはほとんど秘密ではなかった。また、全般的な情勢がきわめて重大で、この問題をとくに提起する時間を党のためにみつけること、そうする可能性を党のためにみつけることがこれまでわれわれにできなかったことも、疑いない。いまでもわれわれはこの問題をやっとなり提起しているのである、なぜなら、われわれがここで、われわれの政治的話し合いのなかで審議してきたチャンス、このチャンス——冬の戦役を避けるという——はきわめて小さなものだからである。共和国の全般的な情勢は、さきに指摘したように、かなり好転しているので、いまではわれわれはもっと冷静に審議することができる、いまではわれわれは協議会を早目に切りあげる問題を提起しはしない、コルチャックとデニーキンが攻勢に出ていた時期には何度かそうしたのだが。党大会の終るのをまたずに、多くの責任ある働き手が直接戦線に散っていった党大会もあった。われわれが大会をひらくのは時たまであるし、大会で重要な問題を論じることができるのも時たまであると思われるかもしれないが、以前には、時たまひらかれる大会を終えることすらあえてすることができなかったのである。いずれにせよ、いまわれわれは、自分にわくをはめずに、現在の討議を終えることができるし、またそうしなければならないような状態におかれている。なお一言したいが、カリーニンの議論のなかにあった、事態をマルクス主義的に説明しようとする若干の企ては、逆に、マルクス主義から遠く離れていたように私には思われる。そして正しい、マルクス主義的な問題提起をしたのは、モスクワ委員会の決議——この決議は、もちろん、諸君全部がお読みになっているし、小冊子として発行されてもいるし、新聞『プラウダ』に発表されてもいる——と、中央委員会の手紙であると私には思われる。

モスクワの決議や中央委員会の手紙に代わるものとしてではなく、その補足の材料として委員会（委員会を設けるという決定がくだされるなら）に提出したいと思っている何行

かを読んでみたい。モスクワ委員会の決議は、問題の正しい解明をあたえていると私には思われるし、この点ではほとんどすべての人の意見が一致している。この文章をすこし読んで、それについてすこしばかり述べさせてもらいたい。補足はこうである。「ソヴェト共和国の存立の初期の未曾有に困難な状態、極度の荒廃と最大の軍事的危険は、『重点的な』（したがって、事実上特権的な）官庁と活動家グループとを他と区別することを避けられなくした。これは避けられなかった。なぜなら、こうした官庁やこうした活動家グループに人手や資金を集中せずには荒廃した国を救うことはできなかつたし、これらのものを強化することなしには、全世界の資本家はきっとわれわれを押しつぶして、わがソヴェト共和国が経済建設に着手することすら許さなかつたであろうからである……」。

専門家にかんしてわれわれはここで非常にはげしい攻撃を耳にした。同志クトゥゾフの演説には、プロレタリアートがソヴェト・ロシアから見たものは事態の好転ではなく、その逆で、しばしば悪化であるという真実がにじみ出ている。これはほんとうである。だが、たとえば、ソヴェト政府のないウィーンに同じこの悪化があり、それとともに道徳的屈辱は百倍も大きいということを理解する必要がある。だが大衆はこのことが理解できない。われわれが、この二年間にわれわれはなにを手に入れたのか、と質問されるのは当然である。専門家にたいする不満がきわめて広くひろがっているのも、当然である。専門家は必要か必要でないかという問題についてのたたかいが第一位におかれていたのは、当然である。だが、彼らがいなければわが軍隊をわれわれが手に入れることはできなかつたろうということを忘れてはならない。それなしには、われわれは、ハンガリーやフィンランド労働者のおちいったような状態におかれていただろう。問題はまさにそういうふうに提起されている。これらの専門家なしには、われわれは、われわれが一定の高さにのぼること——これについては政治報告で述べておいたが——を可能にした初歩的な歩みをふみだすこともなかつたであろう。われわれが専門家の取扱いを調整することができなかつたなら、われわれはこれをもつことはなかつたであろうし、われわれがつぎの段階に移ることはできなかつたであろう。だが、われわれが彼らを自分の手中におさめ、馬車につけたいまでは、また彼らがわれわれから逃げだしていかずに、逆に全部の者がわれわれの方に走ってくることをわれわれが知っているいまでは、われわれは党と軍隊内の民主化をたかめさせるよう努力するだろう。読むのをつづけよう（決議案を読む）……

第一項（読む——党員の自主性を発揮させる他の方策とならんで、党員がもっと頻繁に、もっと広範な会議をひらくことを無条件の義務とすること——青山加筆）。これは追加である。同志トムスキーは、われわれも再三述べたことを引合いに出して述べた——中位の人たちを押しだす必要がある、上部の人たちは疲れている、中位の人たちをあたえよ、と。これは一挙に実行することはできなかつたが、新しい、おそらく二十回目の試みをすれば、成功するだろう。そうすることなしにはソヴェト・ロシアの事業は絶望となるだろう。だがわれわれはそれが絶望ではないことを知っている。なぜなら、わが国には青年がいるからである。最初の試みが成功しなかつたなら、つぎの試みをくりかえそう。

第二項（読む——党の誤りの批判を、総じて党内批判をいっそう系統的に、かつ広範におこなうことのできる機関誌（討論紙その他）を創刊すること——青山加筆）。この点では、批判の自由は桃をたべる自由と一致するか、といういくらか意地の悪い質問が提出された。私の補足案には、委員会の提案にもとづいて、ありうべきさまざまな保障のなかの

一つの方策を示している。国が危険な状態にあるときには、コルチャックがヴォルガに達しようとしており、デニーキンがオリョールに達しようとしていたときには、なんの自由もありえない。そういうばあいに、大切にする必要のあるものは、それではない。しかし、軍事情勢は、いまでもかんばしくないし、軍事上の幸運が変わりやすいことは、われわれみな知っている。われわれはこの問題を日程にのぼせなければならない。だが、軍事上の危険がせまったときに別の行動をとらないと誓ってはならない。そうなれば、もう一度懸命の努力をはらわねばならないし、議論などはしてはならない。頑張って、全力をつくすだけである。われわれは決してそうしないと誓いはしないし、われわれが大勝利を得ないかぎり、われわれもそんなことはしないと誓ってはならない。以上が桃についての私の回答である。

第三項（読む——一方の「専門家」と責任ある活動家、他方の大衆とのあいだのこのような不平等（生活条件、賃金の額その他の点での）を一掃する方策について十分正確な、実践的規則をつくりあげること。この不平等は、民主主義に違反し、党の解体と共産党員の権威の低下とのみなもとになっている——青山加筆）。この点で同志プレオブラジェンスキーは、ジノヴィエフも提起した問題を提起した。規制することは適当かどうか、規制とはどう理解すべきなのか、と。この問題は未決にしておこう、なぜなら、委員会ではこの問題が詳しく検討されるだろうから。委員会では、規制とはこまかな項目のことなのか、特別の機関をつくることなのか、はりきりするだろう。

第四項（読む——中央委員会とならんで統制委員会を設置する必要をみとめること。この統制委員会は、党员としての最大の素養をもち、もっとも経験に富み、公平で、厳重な党統制を実現する能力をもつ同志から成らなければならない。党大会によって選出される統制委員会は、あらゆる提訴を受理し、それを審理する権限をもたなければならない、中央委員会と合意をとげ、必要なばあいには中央委員会と共同の合同会議をひらき、あるいは問題を党大会に移す——青山加筆）。ここで報告者の同志は、この問題は委員会によってとりあげられたが、大多数がそれを否決したと述べた。私の考えでは、——私はこの問題を自分一人の名で提出するが、——私の考えでは、否決するべきではなく、即座に採択することができないなら、いずれにせよその前によく考えるべきである。ここで、中央委員会組織局には提訴が五〇〇件もたまっている、と指摘された。組織局は数万の人を配置しなければならない。そのうえ、組織局員でいくつかのソヴェト内の職務に追われていないような人は一人もいない。こういう事情のもとでは未知数を扱わなければならないし、こういう事情のもとでは、経験をつんだ人たちだけに正しい解決を可能にする勘によって問題を解決するよりほかはない。しかもそういう人たちでもしばしば誤りをおかすことになるのである。こういう事情を考慮して、われわれは、すくなくとも一五年の党歴をもち、党の信頼を得ており、公平なことできわだち、この点で手助けになってくれると同時に、独立性という点では、大会で選出されるので組織局にまさるような人々を見つけたいと思っているのである。私は、この措置をとることは可能であると思う。中央委員会の仕事を停滞させたり、決定をくださのを中止するわけにはいかない。それについての特別な保障はないし、それを提案することもできない。ドイツの労働者党には以前にも統制委員会があった。この統制委員会がわが国の軍事情勢のもとでどれほど可能であるか——このことを請けあうわけにはいかない。しかし、いずれにせよわれわれにはこの措置をとることが

できるし、中央委員会はこの道にふみだしたのである

中央委員会の手紙にはこう書いてある。「……すべての県委員会のもとに、もっとも公平で、組織全体の信頼を得ている同志のなかから特別な党委員会を組織し、それぞれの提訴は、この委員会に持ちこまなければならない」。ここには公平な同志と述べてある。戦闘的な活動には——軍事的活動にも、経済活動にも、組織活動にも——熱情的な人たちがしばしば絶対に必要である。なぜなら、大きな熱情なしには彼らは大きな努力を示さないし、疲弊した国で急を要する当面の任務を解決しはしないからである。逆に、このばあいには、おそらく、高度に行政的な性質はもたないが、豊かな人生経験をもった人が必要である。全ロシアにわたって各県にこういう人がみつかるとどうか、それには疑問をいただいている。いま設置が予想されており、諸君が設置するはずの、県委員会のもとの統制委員会の経験、この経験がたとえ不首尾なものになっても、われわれの企画が全部失敗に終わったという断定をくだしてはならない。わが国の各県に、大会から大会まで頑張りとおす力のある同志たちが、十分な人数はいないということは、ありうる。だがたとえ各県にそういう人がいなくても、中央には人生経験をつんだ、しっかりした同志をわれわれはみつけることができる。だから私は、われわれがこういう機関をあきらめてはならない、と思う。

こう言う人がいるかもしれない。この機関が存続できる保障はどこにあるのか、と。われわれは、幅広い批判の自由など、総じて問題になりえない、死にものぐるいの内戦の条件のもとにおかれている。われわれにはそれどころではない、戦争を終らせるために全力をつくす必要がある。戦争の条件が違ったものになるなら、情勢は違ったものになるだろう。現在の条件のもとでは、われわれはたくさんなことを保障するわけにはいかない。あからさまに言って、この問題を実際に解決するためには中央委員会をあてにするわけにはいかない。中央委員会は仕事に追われている、追われすぎているからである。自分のことから判断してみて、まだすませていない多くの仕事ややりっぱなしにした仕事のために首がまわらないと感じていないような中央委員が一人でもいるかどうか、知らない。私は、この委員会をつくること、この仕事に完全に専念することができ、自分はまったく独立していて、どの中央委員も組織局も政治局も究めることのできない問題にたずさわっているのだと確信できるような、同志たちからなるグループをつくること以上に現実的な、この仕事を遂行するうえでの保障を考慮することができない。おそらくわれわれは、いま一歩前進することにより、穀物の調達を六千万プードから二億六千万プードに増大したことによって、実践的にこれを究めつつあるのだろう。それでもこれは、疲労困憊していない赤軍をもつためには足りなかったし、「われわれは赤軍からなにを手に入れたのか、われわれは飢えている」と言う労働者をいなくするには足りなかったし、中位の人たちから救援をうけないで、まったくぼろぼろになった上層部をもたないようになるためには足りなかった。だがそれでもわれわれはこの一歩をふみだした。このことは、このような規模に達したはなはだしい疲労のもとですら、この大々的な疲労が減りはじめており、われわれが一かけらのパンの問題を審議することから、われわれがいま直面しているもっと高度な任務に移ることのできる時期がはじまりかけているということを意味している。この任務の解決に、われわれすべては無条件にとりくむであろう。

注) ……は本文中の表記。

速記録によって印刷

## 二 党建設の当面の任務についての決議案

中央委員会の手紙とモスクワ委員会の決議に代わるものとしてではなく、その補足の材料として。

ソヴェト共和国の存立の初期の未曾有に困難な状態、極度の荒廃と最大の軍事的危険は、「重点的な」（したがって、事実上特権的な）官庁と活動家グループとを他と区別することを避けられなくした。これは避けられなかった。なぜなら、こうした官庁やこうした活動家グループに人手や資金を集中せずには、荒廃した国を救うことはできなかつたし、これらのものを強化することなしには、全世界の資本家はきっとわれわれを押しつぶして、わがソヴェト共和国が経済建設に着手することすら許さなかつたであろうからである。

この事情は、克服することの困難な、資本主義的および私的所有者的な慣習・気分の残存物と関連して、全党の注意をくりかえしくりかえしつぎのことを実施するための闘争に向ける必要があることを明らかにしている。それは……（1）

（1）手稿が一ページ分欠けている。

……上述の原則的問題について一致している党の諸決定が空文に終らない実践的、実務的保障が必要である。そこで本協議会は、つぎの諸点をただちに決定し、実行し、さらにつぎの党大会に提案して確認してもらうよう、中央委員会に提案する。

（一）党員の自主性を発揮させる他の方策とならんで、党員がもっと頻繁に、もっと広範な会議をひらくことを無条件の義務とすること。

（二）党の誤りの批判を、総じて党内批判をいっそう系統的に、かつ広範におこなうことのできる機関誌（討論紙その他）を創刊すること。

（三）一方の「専門家」と責任ある活動家、他方の大衆とのあいだのこのような不平等（生活条件、賃金の額その他の点での）を一掃する方策について十分正確な、実践的規則をつくりあげること。この不平等は、民主主義に違反し、党の解体と共産党員の権威の低下とのみなもとになっている。

（四）中央委員会とならんで統制委員会を設置する必要をみとめること。この統制委員会は、党員としての最大の素養をもち、もっとも経験に富み、公平で、厳重な党統制を実現する能力をもつ同志から成らなければならない。党大会によって選出される統制委員会は、あらゆる提訴を受理し、それを審理する権限をもたなければならず、中央委員会と合意をとげ、必要な場合には中央委員会と共同の合同会議をひらき、あるいは問題を党大会に移す。

一九二〇年九月二十四日

レニン

注)……は本文中の表記

第 42 卷『ロシア共産党（ボ）第 9 回全国協議会』P270～276

1920 年 9 月 24 日